

黄 kou kaku 雀 雀

No.23
2014年



V.xwittrockiana By Etsuko Yamane

創立90周年を迎えて
—受け継がれる建学の精神—

川村学園女子大学

大学の新しいスタート

国際アンデルセン賞受賞記念

上橋菜穂子特任教授 特別講演

川村学園女子大学附属保育園

お散歩大作戦

川村幼稚園

リトミック

川村小学校

放課後活動の充実

川村中学校・高等学校

絆を深めるクラブ活動

オーストラリア語学研修

キャンパス紹介

中高校舎の中庭にある樟、ヒマラヤ杉、櫻は学園の歴史とともに大きく成長し、そこに集う生徒たちを優しく見守り続けています。緑あふれるキャンパスで、豊かな学びを実践してまいります。



学校法人 川村学園

創立90周年を迎えて

受け継がれる建学の精神



理事長・学園長
川村 正澄

のご尽力と、学園の教育に賛同し支えてくださった保護者の皆様、同窓生の皆様の格別のご支援、ご協力の賜物と深く感謝いたしております。

本学園は大正13年（1924）に「川村女学院」として目白の地に呱々の声をあげ、

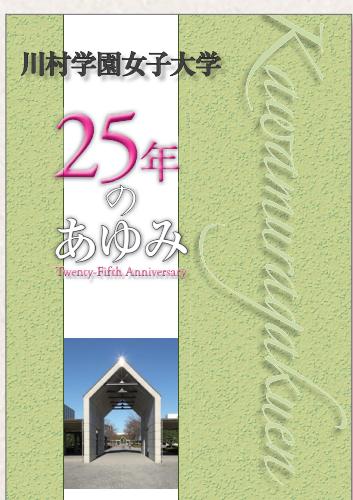
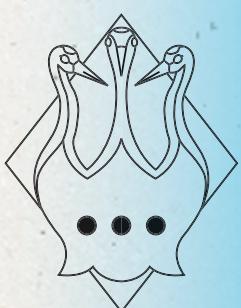
川村学園は平成26年4月12日、創立90周年を迎えました。いま、90年の学園の歴史を回顧いたしますとき、大正、昭和、そして平成とその歩んできた道程に歴史と伝統の重さを強く感じさせられます。さまざまな試練を克服し、幼稚園から大学院までの女子一貫教育を行う学園として成長することができますのも、創立者が女子教育に捧げられた意欲と情熱もさることながら、今日の学園の基礎をより強固なものにしてくださいました多くの先人の皆様

爾来90年今日まで「感謝の心」「女性の自覚」「社会への奉仕」を建学の精神として継承してまいりました。

「感謝」とは、万物に対する愛の心であり、私どもの日常に欠くことの出来ない精神的土壤でございます。この精神は人間形成の根幹であり、学園は貫してこの精神を探求しております。これを土台にして、いかなる環境におかれましても、しっかりと対処します。これをお伝えいたします。平成27年度から文学部国際英語学科と生活創造学部観光文化学科が、新たな学びの場所として目白キャンパスに移転することとなりました。今号で詳しくご紹介させていただい

することを目標としております。創立者は、「女性の自覚」の重要性を認識し、人がより良い社会を築いていく時に、女性だからこそできる社会的意義をその自覚として追求してまいりました。いま、国際化と共に、より複雑化する社会において創立者の求めた「感謝の心」を基盤に「女性の自覚」を生かした自己の確立を願い、社会の一員としての「奉仕の精神」を実践できる女性を育成することの重要性を改めて実感しております。

大学の新たなスタートは、次の創立100周年に向けてのゆるぎない一步となり、「人づくりの根幹は女子教育である」とした創立者の教育理念を更なる発展へと結びつけるものになると存じます。脈々と受け継がれている伝統と建学の精神を礎に、学園教職員全員が一丸となつて日々のより良い教育活動に全力を尽くしてまいります。皆様の温かいご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



▲川村学園女子大学25周年史

ておりますが、2学科の教育をクロスオーバー学習で有機的に結びつけ、目白を舞台により魅力的な教育を実現し、学生の多様な要望に応えていきたいと考えています。豊かな自然に包まれた我孫子キャンパスにおいては、専門的学術の修得のみにとどまらず、原点回帰をキーワードに「こころ」の教育の浸透を図り、おおらか且つ人間力の涵養に努めてまいります。



川村学園

教学の指針

創立者川村文子の建学の精神に則り、「感謝の心」を基盤とした女子一貫教育の完成を目指し、時代に即応する人材の育成を理想とする



創立者
川村文子

創立者は、「人づくり」の根幹は女子教育であるとし、この教育の振興により理想社会の実現が図られ、ひいてはこの教育が人類愛に結ばれた平和な世界の創造に寄与するとの確固たる信念のもとに「川村女学院」を創設しました。

創立者は、「感謝の心は最も奥深く、美しく、気高く、尊い心」であり、「物を生み出す力のある愛の心」と表現されました。つまり創立者の標榜された「感謝」とは、単なる儀礼的なものではなく「愛の精神」を基底に、

一、感謝の心は全ての基本であり、絶対的なものである。

一、利害を超越し、全てを愛する心であり、正しい活動力の源泉である。

とし、「まことの感謝は愛に對して愛をもつてこたえる心」であり、「感謝と愛は表裏一体の心の作用」とも表現されました。

川村中学校・高等学校の「誓いの言葉」の中に「感謝の心で万事に対し文化と己を高めましょう」というのがありますが、創立者は「感謝の心」をもつて自己の研鑽に励めと教え、その心は自他の心を素直に、清く、明るく感動させるものであり、いつも生命あるものすべてを愛する気持ちを持つことにより、自ずとその品位が備わり

力しております。

幼稚園から大学院までの一貫教育によるきめ細やかな教育を施し、今日まで豊かな人間性と知性・品性を備えた数多くの卒業生を世に送り、社会の要請に応えるべく努めしております。

豊かな人間性が育まれると確信し、その実践に傾注されました。

創立者は、「人間性の円満なる発展を遂げる向上の経路が平和な人類文化を創り上げると考え、女性は女性としての深い自覚と責任と使命を持たなければならぬ」としました。すなわち、創立者の説く「女性の自覚」は「人間としての自覚」であり、それはまた「感謝の心」の裏付けがあつて初めて自己完成の道を歩むことができるときました。

そのためには、形式主義・画一主義の教育を排し「自己の立場を自覚し、各人が理

想に向かって邁進できるよう指導する」「意思の教育」をしなければならないとしました。そして「川村学園は、知識を教えることのみを目的とせず、知識も芸能も全て人間を造るための手段であり、如何なる境遇に際しても、自分の人間としての本分を生かしていくことができ、社会の一員としての義務を果たしうる人材を育成することを目的とする」と述べられました。

川村学園では、この川村文子の建学の精神に則り、その教学の実践として「誓いの言葉」「月間目標」を設定し、「感謝の心」が自然に滋養されるよう日々努力しています。今日のように教育が多様化している時代に、敢えて川村学園の教育の指針を強調するのは「旧さの中の新しさ」を再発見し学園精神を改めて認識してほしいと望むからです。それはとりもなおさず、豊かな人間性を築き上げる今日的教育の意義と、創立者が自らに課した永遠の課題とが合致するからです。

中学校・高等学校 誓いの言葉

- 一、感謝の心で万事に対し、文化と己を高めましょう。
- 一、心身の健康を保つために、自覚と責任を持ちましょう。
- 一、平和な世界が生まれるように、みんなで努力いたしましょう。

小学校 ちかいのことば

- 一、わたくしたちは、感謝の心をいつも忘れず、勉強いたしましょう。
- 一、わたくしたちは、正しい生活をし、体をじょうぶにいたしましょう。
- 一、わたくしたちは、平和な世界が生まれるように、みんなで力を合わせましょう。

創立当初の「学生心得」を受け、戦後の教育制度改革の際に制定された「誓いの言葉」は、現在も毎日の朝礼で子ども達が唱和しています。感謝の歌、月間目標とならび、学園精神を養う大切な伝統です。

時代の流れのなかで、今の子ども達の考え方や物の価値観も大きく変わってまいりました。創立90周年という節目を機に、時代に即した文言にいたしました。毎日繰り返し唱和することで、学園精神を受け継ぎ、明るく優しい、心豊かな女性に育ってほしいと願っております。

月間目標

4月 平和	7月 勤勉	10月 本分	1月 向上
5月 報恩	8月 努力	11月 整頓	2月 札節
6月 健康	9月 感謝	12月 反省	3月 質素



大学の新しいスタート

2キャンパス制にむけて

2キャンパス制の導入

日本を訪れる外国人観光客は年々増加しています。外国から日本を訪れる旅行のことをインバウンドと呼びますが、日本政府もインバウンドの誘致・受入に力を入れているところです。政府は平成15年に観光立国宣言を発し、外国人旅行者を増加させる政策を進めてきました。この年に年間521万人だった外客数は、昨年、平成25年には1千万人の大台を超えて1036万人になりました。また、昨年9月には、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定しました。今後、日本ではさらに多くの外国人旅行者を迎えることになります。政府は、2020年までに年間2千万人の外客を誘致すると目標を掲げています。今後、東京だけでなく日本各地でさまざまな形の国際化が進むものと考えられます。

さて、本学では、栄養士養成関係の設備の整った我孫子キャンパス14号館の完成を受け、平成20年4月より、生活文化学科すべてを我孫子キャンパスに移転いたしました。それまで、生活文化学科の学生が学んでいた目白の第8校舎は、中高校舎の耐震強化工事の間、中高生の教室として使用さ

れていましたが、工事が完成したところで、改めて目白校舎をどうするか計画を立てることとなりました。

最初に述べましたように、現在日本を訪れる外国人は増加し、東京は世界有数の国際観光都市となっています。このような状況で求められるのは、まず、観光に関する実務的な知識と技能をもった人材、国際的な場で通用する英語運用能力とコミュニケーション力を身につけた人材、そして何よりも、世界各地の社会や文化を知り「國際感覚」をそなえた人材です。私たちは、このような人材の育成のために目白に校舎を持つという利点を最大限活用すべきだと考え、英語力を身につけ国際社会への理解を深めるためにアクティブラーニングを実践する文学部国際英語学科と、観光の現場と結びついた学習（視察、ゲスト講師、インターンシップ等）を開拓する生活創造学部観光文化学科のカリキュラムを、目白校舎で展開することとしました。我孫子校舎と目白校舎の2キャンパス制の導入です。

2学科の目白キャンパスへの移転

川村学園女子大学では、こうした考えを基に、文学部国際英語学科と生活創造学部

観光文化学科の二つの学科を、来年4月から目白キャンパスに移転いたします。

今年度までの入学者は引き続き我孫子キャンパスで学び、来年度の入学者から、

4年間、目白の第8

校舎での学園生活を送ることになります。

第8校舎は目白駅から徒歩2分という変便利な場所にあります。この校舎の大学での活用を考えた際に、国際英語学科と観光文化学科ならば、目白を舞台に、より魅力的な教育を実現できるという判断がなされたのです。

国際英語学科には、英語力を活かすため観光業や航空業を希望する学生が多くいます。観光文化学科の学生が観光をはじめとしたサービス業への就職を考えた場合、英語力が必要とされることがあります。今後、この二つの学科が協力することで、学生はより豊かな勉学が行えることでしょう。一

気_ADDRESS

クロスオーバー制度や副専攻を利用しても、国際化が進む東京において、国際英語学科では実際に使える英語力を養成し、学生一人ひとりの「夢」の実現をサポート

目白で導入する新たな教育

国際英語学科では、以前より、教室で声を出して体を動かしながら英語を使い、英語の力を身につけていく教育を「EIA



目白キャンパス



我孫子キャンパスの各学科は、目白キャンパスに二つの学科が移ることをきっかけに、これまでの活動を再検討し、よりよい教育を目指します。川村学園の建学の精神に基づく、「感謝の心」をもった「自覚ある女性」を育てるためには、人格的教育が大切です。そこで少人数講義の強みを生かして「よりそう力」を目標に教育を展開していきます。

我孫子キヤンパスの再構想

こうした2学科の教育をクロスオーバーで実施する。学習で有機的に結びつけ、学生の多様な要望に応えていきたいと考えています。

ます。さらに、立地特性を活かして、産業界のゲスト講師招聘や、現地見学を積極的に行う予定です。

孫子市のイベント参加や、地域情報紙作成などで地域活動をしてきましたが、移転後は、教育効果の最大化を目指し、正課科目の中に地域での様々な実践を取り入れます。また、外国人対応のための準備として、英語の運用能力の他に、日本及び海外の観光や文化の知識なども重点的に習得します。

（English in Action）」などの科目で実践してきました。面白キャンパスでは、アクティブ・ラーニングを拡大し、英語の面白ティップ・マップの作成や、面白在住あるいは面白を訪れた外国人への英語インタビュー、通訳ガイド体験など、地域社会における英語の活動を展開し、さらに実践的な英語のスキルを身につけるよう準備しています。



我孫子キヤンパフ

周りの人によりそう力を身につけてくれることを目指します。

こうして成長した学生は、感謝の心を持って「社会への奉仕」、つまり「社会への貢献」をめざして巣立っていきます。とはいっても学生にとって「社会人」となることは、不安がいっぱいでしょう。そこで、本学では、これまで以上にその準備で

「育て、女子力」。4年間の学習・研究を通じて、「将来の自分に感謝される」ように成長していくほしいと考えています。

す。文学部心理学科は、心理学全ての分野が揃っていることを強みに、学生の個性に合わせた学びを開拓していきます。文学部日本文化学科は、「こころとからだでまなぼう、日本文化」を合い言葉に、実技科目を充実させます。



我孫子キャンパス

上橋菜穂子特任教授特別講演

国際アンデルセン賞 受賞記念

今

年の3月、本学特任教授の上橋菜穂子先生が「国際アンデルセン賞・作家賞」を受賞されました。国際アンデルセン賞は、国際児童図書評議会（IBBY）が「児童文学への永続的な寄与」に対して隔年で授与するもので、過去には『長くつ下のピッピ』のアストリッド・リンドグレーン（1958年受賞）や『ムーミン』シリーズのトーベ・ヤンソン（1966年受賞）などが受賞しています。「小さなノーベル賞」とまで呼ばれる、世界で最も権威ある児童文学賞の一つです。日本人の作家賞受賞は二人目で、詩人のまど・みちお（1994年受賞）以来のことです。

受賞を記念して、7月13日（日）のオーブンキャンパスにおいて特別講演会が開催されました。講演に先立ち、我孫子市の「市民文化スポーツ栄誉賞」の授賞式がとり行われました。我孫子市長の星野順一郎氏より賞状およびメダルが、また教育長の倉部俊治氏より花束が上橋先生に贈呈されました。

◇特別講演

「物語に魅せられて～歩いてきた道、そして、これから～」（要旨）

国際アンデルセン賞を受賞して、自分がこれまでの人生でたどってきた道のりがちょっとでも実際と違っていたら、この賞をいたくことはなかつたろう、と思っています。今日は受賞の経緯をお話しますとともに、私の人生のさまざまな体験がどうよしに物語作家としての今日の自分につながつたかを振り返りたいと思います。

賞の候補に挙がつたという連絡があつたときも、自分が受賞する可能性があるとはほとんど思つていませんでした。世界中の優れた児童文学作家がノミネートされるということもありましたが、それ以前に、これまでの受賞者はほとんどヨーロッパ系で、審査員もスペイン人の審査員長をはじめとしてヨーロッパ文化圏の人があつたのです。そのため、日本語で書かれた長編小説が高く評価されることはまずないと思つていました。

特別講演は14号館の大講堂に300人近い聴衆を集めて行われました。講演終了後には全国から訪れたファンから熱心な質問が相次ぎました。以下に講演の要旨を記します。

擦やふれあいが描かれていることなどが言及されていました。私は作品のこうした点が評価されたことを嬉しく思うとともに、一方で、国際的な場で日本の作品が読み手の琴線にふれることが少ない理由をかいりました。

日本は、文化的にも言語的にも世界の他の地域とはかなり異質なところがあります。国内だけで暮らしていると、それが海外の人々にとつていかに理解しがたいものであるかを忘れがちです。たとえば私は、オーストラリアに小学校教員として赴任した際、日本には「ニンジャ」がいるのかと聞かれてびっくりしたことがあります。

文学にたずさわる者にとってこの異質性は切実な問題です。私がベルリン国際映画祭で各国の著名な作家たちと出会つたとき、まず感じたのは、自分たちが英語でしか話し合うことができず、お互いの作品をそれぞれの母語で読むこともできない、ということでした。ウガンダの著名な女性詩人は、母国語の音や感覚による表現を読者に理解してもらいたいのだが、それはなかなか難しい、と嘆いていました。自分の文化や言語の独自性と、異なる文化をもつ人が共感し得るメッセージを両立させることで、作家がつねに直面すべき課題であるは

その一方、作品が文化や言語の壁を越えて受容されることも事実です。私がギリシャで会つたガイドの少年は、漫画『ナルト』のファンだといつていろいろ質問していました。また、ドイツで放送されている『精霊の守り人』のアニメをドイツ人と日本人の一家が揃つて楽しんでいたと聞き、私はとても嬉しくなりました。漫画やアニメは絵があるので伝わりやすいとはいって受容されることも事実です。私がギリシャで会つたガイドの少年は、漫画『ナルト』のファンだといつていろいろ質問していました。また、ドイツで放送されている『精霊の守り人』のアニメをドイツ人と日本人の一家が揃つて楽しんでいたと聞き、私はとても嬉しくなりました。漫画やアニメは絵があるので伝わりやすいとはいって受容されることも事実です。

では、私が幼いころからどのように物語に接してきたかということの一端をお話しします。私は東京、根岸の生まれですが、幼いころ父方の祖母がよくお話をしてくれました。祖母の話はたいへん面白く、また生活の中に根づいたもので、たとえば飼っていた猫がしばらく家をあけたあと戻つてくると「この猫は山で修業をしてきたからもうすぐ猫又になる」というようなことを言うので、私には物語と現実の境目が判然としませんでした。『ウルトラマン』の最終回を見て「ウルトラマンが死んじゃった」といつて本気で泣きだすよう



我孫子市市民文化スポーツ栄誉賞を受賞



子どもだったのです。このような子どもの感性が、いかにして現実と非現実のあわいを見てとるものに変化していくのかは興味深いものがあります。

中学生のころ、私はイギリスなど海外の児童文学に親しむようになりました。とくにJ·R·R·トールキンの『指輪物語』や、『第九軍団のワシ』などローズマリ·サトクリフの作品に強い影響を受けました。第

九軍団のワシ』は、ローマ時代のイギリスを舞台に、退役したローマ軍兵士マーカスと、彼が奴隸として使っているケルト人工スカの交流を描く作品です。あるときマーカスはエスカに向かって、「なぜケルト人はローマ人に抵抗するのか、ローマがもたらす文明は良いものばかりなのに」と問いかれます。エスカは、マーカスの持つ直刀のローマ式短剣と、複雑な流水文を彫りこんだ自分の盾を示し、「あなた方ローマ人の感性はわれわれとは違う」と答えます。サトクリフの作品は、文化や価値観の異なる人々が互いを支配しようと争う社会の現実を描くと同時に、一人ひとりのふれあいによってそれを越えられる可能性をも示しているのです。

私は後に専攻した文化人類学においても同様の問題に直面することになります。私はオーストラリアを研究領域に選びましたが、当初は「アボリジニ」と「白人」の間に摩擦が存在する、という程度の認識しかもつていませんでした。しかしおーストラリアに踏み入って、私はこの土地の抱える問題がいかに複雑なものかを痛感しました。まず、「アボリジニ」と呼ばれるオーストラリア先住民は250以上の異なる言語をもつ様々なレベルの集団に分かれています。大陸の広大さゆえかつては集団間の交



14号館 大講義室にて講演

流は困難で、彼らには「一つの民族」という意識はありませんでした。また、多年にわたる混血により、外見も民族的特徴が顕著な人から白人と見分けがつかない人までさまざまです。さらに、白人のような容貌の人が伝統的な文化や技術をきちんと身につけていたり、外見的にはいかにも先住民らしい人がほとんど伝統文化を知らなかつたりします。

このような多様性は彼らの日常に深く影響します。私の大切な友人は、その町で初めて高等教育を受け、やがて大学の通信教育で免許をとり小学校教員になったアボリジニ女性です。アボリジニには親戚の葬儀に出席することを非常に重視する文化がありますが、たいていの人には300人ばかりの親戚がいて、毎週のように葬儀があります。勤め人である彼女にとって、そのす

べてに出席することは困難です。彼女はいつも先住民としての伝統が要求するものと、近代社会の一員としての立場が要求するものの板ばさみとなっていました。こうした例をみると、彼らの問題は「アボリジニの文化を守れ」と声高に叫ぶことで解決するものではないことが分かります。

しかし、町に住むアボリジニも、週末にはトラックでブッシュに出かけて大トカゲを狩ったり、河原に起きた火でエミューを丸焼きにして食べたりしていました。また彼女の家には「親戚」だという見知らぬ人物がちよちよ転がりこんでは雑魚寝していました。このような生活習慣は日本人には奇異なものに映るかもしれません、逆に彼らにしてみれば、毎朝満員電車に押し込まれていく日本人の生活が異様なものに見えるのです。

このような体験のすべてが、私の「物語を書く」嘗みに反映しています。それはこの世界にさまざまに違う感じ方、考え方、生き方が存在し、それが誤解や軋轢の原因となる一方で、その違いを越えて理解し合うことも可能だという認識に基づくものです。ですから私は、主人公だけが正しい物語を書くことができません。私の描く世界は、複数の価値観や文化が絡みあうことによって、主人公の側にも、また主人公と対立する側にも、多様な物語が紡ぎだされていく世界なのです。今回の受賞において、スペインやベネズエラなど世界各国の審査員の方にその点を評価していただけたことがとても幸せです。



国際アンデルセン賞 メキシコでの授賞式(平成26年9月10日)

PROFILE



上橋 菜穂子先生

上橋先生は、文化人類学者としてオーストラリアを専門に研究を進めるとともに、作家として、アジア的な異世界を舞台とする多くのファンタジー小説を著しています。代表作『精霊の守り人』や『獣の奏者』はアニメにもなり、NHKで放映されています。作品は英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、韓国語、中国語に翻訳され、小説、アニメとともに海外でもたいへん人気があります。



講談社
「獣の奏者」



偕成社
「天と地の守り人」



お散歩大作戦

歩くの大好き！

毎年、その時の子ども達の成長に合わせた形で季節を感じながらの「お散歩」を保育に取り入れていますが、今年度も職員で話し合い、どうしても車での生活移動が多い子ども達、散歩を通じて歩く力を身に付け、体力向上につなげて欲しいとの願いも込め、赤ちゃん組から年長児まで各年齢ごとに年間を通しての取り組みを行っています。

乳児組

足の裏の刺激

0歳児（ちゅうりつぶ組）はベビーカーで出かけます。外気に当たる心地良さを感じたり、時には足の裏に刺激を感じながら「たっち」してみたりと、その子のペースで楽しめます。



1歳児（たんぽぽ組）は、月齢の高い子は保育者と手をつなぎ、一生懸命に「あんよ」し、小さい子はお友だちと一緒に避難車に乗って出かけます。大学では広い芝生をトコトコと歩き回ったり、木の実を見つけたり、電車を見つけると大興奮で「あーーーーー！」と指さしたりと楽しんでいます。皆でベンチに座つての水分補給の「ティータイム」もお気に入りです。1年で随分と歩行がしつかりする時期で「お散歩力」の基礎を作っています。

お散歩力の基礎



2歳児（さくら組）は歩くのが上手になりました。始めは「お散歩ロープ」でつながって歩く所から練習し、今ではお友だちと2人で手をつないで歩けるようになります。保育園の周りの田んぼ道や電車の見える道など、お散歩範囲も広がります。歩くスピードも段々と早くなっています。お友だちと励ましながら頑張っています。



4月から取り組んできた「お散歩大作戦」、もうすぐ半年になろうとしています。各年齢ごとに進級した頃よりも歩く力が付きました、たくましく頼もしくなってきました。これからも継続して子ども達の体力向上に繋げて行きたいと思います。

幼児組

あるこーあるこーわたしはげんきー♪

3・4・5歳児（ゆり組・ばら組・ひまわり組）は3クラス一緒にお散歩へ行くことが多い、大きい子と小さい子がペアになり手をつないで歩きます。小さい子が転ばないように気を付けながら、また行列の前の子との間隔が開かないよう見ながら歩くのはとても難しく、おしゃべりに夢中になつているとついつい遅れてしまったり、転んでしまったりとアクシデントが起ります。これも経験、積み重ねることにより少しずつ上手に、疲れず、早く、遠くまで歩けるようになります。



リトミック

音楽で心と身体の調和をはかる

川村幼稚園では、今年度よりリトミックの時間を設けました。専門講師の指導で、毎週月曜日に実施しています。

リトミックとは、ソルフェージュという

音楽教育の一種で、音楽で楽しく遊びながら子ども達の持っている集中力、想像力、思考力を養い、あらゆる能力を引き出す教育です。

ゆうぎ室で学年ごとに30～40分ずつ行う活動は、ピアノの合図で「よろしくお願ひします」と挨拶をしてから始まります。

クラスごとに円を作つて座り、「はじまりのうた」を歌います。♪○○組のお友達♪○○組のお友達、握手をしよう ギュ、ギュ、ギュ～♪と歌いながら立ち上がります。先生が「大きな声で歌えばいいのではなく、きれいな声で歌ってみましょう」と声をかけると、先生の真似をして優しく歌う子ども達。

その回ごとに内容は変わりますが、雨や虹など季節感にあふれ、イメージがはつきりとしていて、園児の心が動きやすい題材を選びます。そのうえで、各年齢に合わせ、身体を通した音楽表現につながるよう工夫を凝らして活動しています。

6月のある日、梅雨の季節にちなんだ内容で実施した回の様子をご紹介します。

雷が鳴つたらおうちにいるなど先生の指示をよく聞いて、子ども達はまるで絵本の世界に入つたかのように、いきいきと身体を動かします。

③道具を使用しての表現



①音を聴いて表現

ピアノの音を聴いて、その音やそのリズムに合った動きをします。歩く・走る・スキップ・大股で歩くなどの指示や音楽を聴き、自分が感じたように動きます。音が止まつたら自分も動きを止めます。それを繰り返し、子ども達は音やリズムの変化に気づき、素早く反応します。

ボール・布・フラフープ・縄なども適宜使用し、表現する一種の手段として活用しています。

ボール・布・フラフープ・縄なども適宜使用し、表現する一種の手段として活用しています。



④色や言葉を表現

「あか」「あお」「きいろ」など、言葉を口に出しながら、言葉の持つ文字数や長さを手拍子で表すこともあります。言葉を発することと手拍子をするという2つの動作を同時に使うことを繰り返し、全体として調和のとれた動きへと変わっていきます。

このように、リズムを聴いて自分が感じたことを素直に表現することで、音楽を聴く集中力や想像力、リズムを身体で表す表現力が養われていきます。



子ども達はリトミックを通して、自然に身体を動かし、表情豊かに表現することを楽しんでいます。回数を重ねるごとに、身体の動きものびのびと活発になりました。

一つのことからイメージを膨らませて活動を発展させていくと、時には大きな歓声が上がったり、盛んに意見が交わされたりと、普段の保育の様子とは少し違う子ども達の姿が見られます。

これからもリトミックを通じて、子ども達の内なる力、秘めた可能性をたくさん曳きだしていきたいと思います。



放課後活動の充実

放課後の安全・安心を求めて

近年、少子高齢化や核家族化、人々の働き方の多様化が進み、子ども達を取り巻く環境は大きく変化しています。本校においては電車やバスで通う児童が大半で、必然的に居住地域の同年代の子ども達とは生活時間帯が異なるため、日々十分に遊ぶ時間を取りることが難しくなっています。帰宅後の移動は子どもに負担をかけるとともに、昨今子どもが被害者となってしまう事件も後を絶たないという、悲しい現状にあるのも事実です。そのような状況をふまえ、本校独自の取り組みができないものかと検討しておりました。そこで、以前から取り組んでいたアフタースクール・セミナー・や鶴友会活動の選択肢の増加に加えて、毎週月曜日に「学校開放」を設けるなど放課後活動の充実に取り組んでまいりました。

学校の施設を最大限利用して安全・安心な環境で過ごす「場所」の提供によって、移動の必要なくのびのび活動できる「時間」が生かされ、異年齢の触れ合いによる「仲間」づくりを通して人間関係を豊かにするなど、放課後活動には児童、家庭、学校に多くの可能性を秘めています。今年度から開始した取り組みも含め、川村小学校ではの放課後の過ごし方を紹介します。



響き渡る演奏と一体感のある動き

【ブラスバンド・バトン隊／合唱隊】

対象	4年生以上の希望者
活動曜日	毎週水曜日、木曜日
活動時間	14時15分～16時00分

鶴友会活動



パートごとに心を合わせて



生き生きと歌うメンバー達

第81回(平成26年度) NHK 全国学校音楽
東京都コンクール 予選

ブラスバンド・バトン隊は、運動会や学園祭での発表を目指し、週1回は外部講師による本格的な指導を受けるなど、日々の練習に励んでいます。今年は、新たに合唱隊が活動を開始し、8月には音楽クラブと共にNHK全国学校音楽コンクール杯に出場しました。初めての大舞台という緊張の中、課題曲「ゆうき」と自由曲「もういちど」の星」を堂々と歌い上げました。合唱後のメンバー達の晴れやかな笑顔がとても印象的でした。

対象	4年生以上の希望者
活動曜日	毎週水曜日
活動時間	14時15分～16時00分

このような活動を通して、技術を身につけることはもちろん、心を磨き、身体を鍛える大切な時間となっています。

【中高クラブへの参加】

水泳部・民族舞踊部・陶芸部	トサル部・書道部・フットサル部
トサル部・書道部・フットサル部	トサル部・書道部・陶芸部



お姉さんたちに見守られて

児童にとって、中学校・高等学校の充実した施設が使えるのも楽しみの一つとなっています。フットサル部の活動では、ボールを追いかけ、広いグラウンドを走り回ったり、書道教室では、落ち着いた雰囲気で作品に取り組む児童の様子が印象的です。

学園や地域のためにと有志が集まり「鼓笛隊」が結成されたのが鶴友会活動の始まりです。名称は変りましたが40年以上、奉仕の心を大切に活動しています。



学校開放



川村学園では、戦後から子ども対象の「川村文化教室」を開いてきました。茶道、華道、図工、英語、国語など、まさに現在のアフタースクールの先駆けともいえる子どものための教養・学習講座です。

「川村文化教室」は一時中断を経て、アフタースクール・セミナーとして生まれ変わり、充実した講座で各年齢の発達段階を

対象 全学年（希望者）
活動曜日 毎週月曜日
活動時間 授業終了～16時まで
施設 フリールーム・図書室・小講堂・校庭・体育館などを開放しています。子ども達が「やりたいこと」を選べるようにと、学習活動・読み聞かせ・DVD鑑賞や遊びなど、様々なプランを用意し、学年やクラスの枠を超えて、思い思いの時間を過ごすことがあります。なかでも、子ども達は図書室が大好きで、読書や読み聞かせを毎回楽しみにしています。



アフタースクール・セミナー (A・S)

対象 全学年（希望者）
活動曜日 毎週火・水・木・金曜日
活動時間 14時20分～15時20分
15時20分～16時20分
講座 図画工作、体操、水泳、英語
（全学年）茶道、華道（3年生以上）



学校の施設を利用するので保護者の方の送迎が不要であり、受講料も比較的低額に抑えられています。保護者の皆様にはアフタースクール・セミナーをうまく取り入れながら、お子様の心配をすることなく時間を有効活用していただければと思っています。

考慮し、楽しく学べるよう内容に工夫を凝らしています。全ての講座は、子ども達が使い慣れた本校施設内で行われ、専門の講師が教えます。

人気の科目は体操や水泳など体育系の講座です。水泳は、赤外線サウナ、ドライヤー専用室などを完備した温水プールで専門講師とプール監視員が指導にあたります。施設を活かした講座といえば、このほかに図画工作があげられます。小学校校舎一階にある窯で焼成を行い、出来上がった陶芸作品は学園祭で展示されます。華道の講座では、毎回活けたお花を持ち帰ります。そのお花を子ども達は自宅で活けることもあり、その様子から技術の習得が実感できるようです。

川村小学校ではこうした「教科以外の学び」を創立以来大切にしてまいりました。これからも子ども達一人ひとりにとって、のびのびと自由に、さらに豊かな体験のできる放課後を届けていきたいと願っています。

放課後活動内容

月	学校開放（全学年）
火	A・S（図画工作－全学年、茶道－4～6年）
水	プラスバンド・バトン隊、合唱隊、A・S（体操－1～3年）、中高クラブ活動
木	プラスバンド・バトン隊、合唱隊、A・S（水泳－1～3年）
金	A・S（英語－全学年、華道－3～6年、茶道－3年）



絆を深めるクラブ活動

放

課後になると熱心にクラブ活動に取り組む生徒の姿が見られます。お互いに切磋琢磨し、支えながら取り組むことで、一人では得られない達成感や真の実力を身につけていきます。本校のクラブは、中学生と高校生が合同で活動しています。学年が進むにしたがって下級生から上級生までの異なる立場でさまざまな状況に出会い、その中で責任感、協調性、思いやりの心などを自然と身につけていきます。

クラブ活動は、充実した学校生活を送る大切な要素です。同じ目標に向かって、励ましあいながら一緒に汗を流す活動を通して、仲間たちとの連帯感や友情が育まれる大切な「人間教育の場」となっています。



stra Voice

*定期演奏会でお客様が楽し そうに演奏を聞いて下さっ ているのを見たとき、頑 張って練習して良かったな と思いました。
(高校生)

*練習が多いので大変なこと もあります、部員全員で一つの音楽を作り出せたとき、 大きな達成感を感じ、とても幸せな気持ちになります。
(中学生)

*先輩方と合奏をしていて、同級生とは感じることのでき ない、協力する大切さを学べました。(中学生)



Voice

*バトン部に入って、自ら周りを見て行 動できるようになりました。初めての 部活で不安だったけれど、先輩方が優 しく声をかけてくれて楽しくなりま した。(中学生)

*バトン部に入って、バトンの技術はも ちろん、礼儀なども学ぶことができま した。(中学生)

*部員一人ひとりが技術向上を目指し努力 している姿を見ると本当に嬉しく思ひま す。また、かけがえのない最高の仲間た ちと活動することができて幸せです。
(高校生)



Futeal フットサル部

フットサルは、ミニサッカーからはじまった1チーム5人で行うスポーツです。「なでしこジャパン」の活躍もあり、近年、女性の人気も高まっています。本校のフットサル部は、人工芝のグラウンドで週に4日、楽しく活動しています。先輩、後輩ともに励まし合いながら練習に取り組み、技術の向上だけでなく、「仲間」を信じてプレーする思いやりの気持ちを学んでいま す。

Voice

*水泳は個人種目ですがチームワークが ある部活です。(高校生)

*屋内で1年中練習ができる設備の整 った環境にあり、先生をはじめコーチや 先輩が熱心に指導してくれます。(中学生)

*互いに競争し、励まし合い、本気で取 り組むことができる部活です。(中学生)



Ceramic art 陶芸部

粘土で作品をつくる喜びはもちろんですが、それだけでなく焼きあがった時の感動や、その作品を生活の中で活かしていく楽しみがあります。

陶芸部では電動ろくろや窯の設備が整い、カリキュラムに沿って技術を向上させながら、仲良く自由に活動しこの陶芸の魅力を十分に味わうことができます。



Voice

- *窯詰の作業を手伝いました。緊張感のある作業で手の震えをおさえるのがやっとでした。(高校生)
- *電動ろくろでは、手びねりで作ることのできない作品ができるはずなので、今、努力しています。(高校生)
- *蓼科で行う合宿は、いろいろな企画を生徒で話し合って決めるので、それだけでも楽しいです。(中学生)

- | | |
|-----------|------------|
| 学術部 | ・家庭科 |
| | ・理科 |
| | ・英語 |
| | ・社会科 |
| | ・パソコン |
| | ・手話 |
| | ・囲碁 |
| 芸術部 | ・漫画研究 |
| | ・競技かるた同好会 |
| | ・演劇 |
| 運動部 | ・吹奏楽 |
| | ・マンドリン・ギター |
| | ・コーラス |
| | ・書道 |
| | ・陶芸 |
| | ・写真 |
| | ・美術・木彫 |
| | ・箏曲 |
| | ・華道 |
| | ・茶道 |
| | ・ハンドベル |
| | ・バレーボール |
| ・バスケットボール | |
| ・卓球 | |
| ・体操(新体操) | |
| ・バドミントン | |
| ・民族舞踊 | |
| ・水泳 | |
| ・ソフトテニス | |
| ・陸上競技 | |
| ・剣道 | |
| ・バトン | |
| ・モダンダンス | |
| ・フットサル | |
| ・ハイキング愛好会 | |

Konjaku 競技かるた同好会

競技かるたは、小倉百人一首をつかって札を取り合う競技です。記憶力や瞬発力も必要とされるハードな競技ですが、お互いに競い合いながら日々楽しく活動しています。競技は畠の上で行うので、和の雰囲気を存分に楽しむことができるのも魅力です。また、競技だけでなく、和歌の響きや意味を楽しみ、作者や時代などの背景を想像し、遙かな時代に思いを馳せることもクラブの目標としています。



Wind Orches 吹奏楽部

吹奏楽とは字のごとく、吹いて奏でる音楽のことです。吹奏楽は一人で奏でることができません。部員一人ひとりの音があわさって一つの音楽が作られていく、というのは吹奏楽でしか味わうことのできない大きな魅力です。1年を通して本番がたくさんあるため、練習は多いのですが、コンクールでは学校外の大きなホールで演奏できます。ほかにも学園祭や定期演奏会などを通して充実した部活動生活を送ることができます。吹奏楽が、人々の心を動かし、感動を与えられるものであると信じ、私たちは一丸となって日々の練習に励んでいます。

Baton バトン部

体の一部のようにバトンを使って、力強くまた優雅に踊り、様々な感情や物語を表現するところにバトン部の魅力があります。専門のコーチの指導を受けてバトンや踊りの技を磨き、体育祭や学園祭、そして高校生はシニアフェスティバルに、中学生はジュニアフェスティバルに向けて演技を仕上げていきます。

中学1年生から高校3年生までの部員が、心を合わせて活動し、思いやりや責任感を育んでいることもバトン部らしさだと思います。

Voice

- *かるたの試合では、並べられた札を短時間で覚えなければならないので、暗記力や集中力がつきました。(高校生)
- *上下関係が厳しくなく、アットホームな雰囲気のクラブです。札で始まり札で終わり、しっかりと伝統的な礼儀作法についても身につけることができます。(高校生)
- *競技かるたは畠の上の格闘技とも言われ、足腰も鍛えられます。(中学生)

Swimming 水泳部

水泳の大会は競泳、水球、飛込競技、シンクロナイズドスイミングの4競技により行われますが、私たち水泳部は競泳に主眼をおいて取り組んでいます。競泳は0.01秒を争う競技なので辛い練習もありますが部員同士声を掛け合い、支えながら練習しています。クロール、平泳ぎ、バタフライ、背泳ぎの4泳法を全て練習し、自己の専門種目で少しでもタイムが向上できるよう日々練習に励んでいます。



オーストラリア語学研修

体験して学んだ17日間

文

化の異なる家庭での生活を通して、より実践的なコミュニケーション能力、国際感覚の助長を図ることを目的に、オーストラリアでの語学研修を行いました。南半球にあるオーストラリアの季節は冬。夏真っ盛りの東京から一気に冬の世界に飛び込んだ生徒たちは、気候の変化に戸惑つていましたが、オーストラリア最大のゴシック建築であるセントパトリック大聖堂、150年の歴史を誇るフィッシュロイ・ガーデンや19世紀の万博の熱狂を今に伝えるロイヤル・エキシビジョン・ビル&ガーリトン庭園などメルボルン市内観光を楽しみました。学校でホストファミリーと対面し、最初は緊張した面持ちでしたが、ホストファミリーの温かい歓迎の気持ちが伝わり、安心した様子でそれぞれの家庭へと向かっていきました。



研修先となる Presentation College Windsor Melbourne は7年生から12年生までが通う女子校です。生徒たちは8時30分までに登校し、出席を取つてから、現地校の生徒たちと一緒に、オーストラリアで人気のあるフットボールのPE、Science、Food Tech、Artなどの授業を受ける。午前中の Recess（休み時間）には、「Morning Tea」とこの休憩兼軽食

を取る時間があります。学校で出たおやつその他に、ホストファミリーが準備してくれた軽食をいたたく生徒もいて、和やかな雰囲気の中で次の授業へと備えます。

偶然にも研修の日には、Presentation Day-Our School Birthday（創立記念日）で、生徒たちはホストファミリーからの贈り物（衣装や仮装）、現地校の生徒の輸入入り楽しむ過ぎました。2週目になると英語圏の生活にもだいぶ慣れ、全校集会では語



ホストファミリーと



個性的なオブジェの数々



英検対策講座

平成26年4月から、英検対策講座が始まりました。小学生から高校2年生までを対象として、実用英語技能検定の合格を目指して学習に取り組んでいます。



講座は年に3回ある英検に合わせて3タームに分かれており、毎回それぞれの受験級に向けて受講の申し込みを受け付けています。この講座は、英検対策のために作成された本校独自のカリキュラムにしたがって進められ、回ごとにテーマが異なり、45分授業を2時間受講して1回分が完結する形式になっています。講座の合間に休憩時間があり、生徒たちはラウンジでお茶を飲んでおしゃべりを楽しみ、リフレッシュして次の時間に臨みます。レベルは5級から1級対策まで幅広く設定し、向上心を持って取り組む生徒たちのモチベーションにもつながっています。一人ひとりの目標に向けて受講するため、小学生と中学生、高校生が同じ教室で講座を受ける様子も多くの生徒たちの様子を見ていると、お互いに良い刺激となり、真剣に練習問題に臨むことができるようです。

グローバル化が進展する今日の国際社会にあって、英語能力の必要性はますます高



❖ 国境や年齢も越えて、たくさんの感情を共有できた、本当に濃密な2週間でした。ランチやリセス（モーニングティー）の時も、いつも現地の子が話しかけてくれ、またホストファミリーとは、オーストラリアと日本について多く話し、多くを学びました。この語学研修で得た素敵なものだらや思ひ出は、一生の財物です。

（中学生）

私が特に嬉しかったことは、学校のPresentation Day です。学校の生

オーストラリア語学研修に参加して

❖ 海外で2週間というのは初めてだったので、とっても嬉しかったです。生徒さんはみんな優しくて、ノリがよくて、本当に楽しかったです。英語もゆっくり話してくれて、分からぬときは、分かりやすい単語で教えてくれて本当に嬉しかったです。

（高校生）

❖ はじめ、言葉がうまく聞き取れなくてとても緊張していたけれど、ホストファミリーと一緒に過ごしていくうちに、少しずつコミュニケーションがとれるようになつてとても嬉しかったです。

（高校生）

❖ 国境や年齢も越えて、たくさんの感情を共有できた、本当に濃密な2週間でした。ランチやリセス（モーニングティー）の時も、いつも現地の子が話しかけてくれ、またホスト

徒さんたちとたくさん交流できたので、とっても嬉しかったです。生徒さんはみんな優しくて、ノリがよくて、本当に楽しかったです。英語もゆっくり話してくれて、分からぬときは、分かりやすい単語で教えてくれて本当に嬉しかったです。

❖ 海外で2週間というのは初めてだったのですが、ホームシックにはならず、むしろずっとそこで暮らしていくような安心感がありました。別れ際、涙が止まりませんでしたが、また会えることを信じて必ずオーストラリアの家族のもとへ帰りたいと思います。

（高校生）

❖ オーストラリアに関する興味深いお話を聞けたり、メルボルンの市内を観光したり、語学研修以外でも楽しい思い出がたくさんできました。貴重な経験になつたと思います。

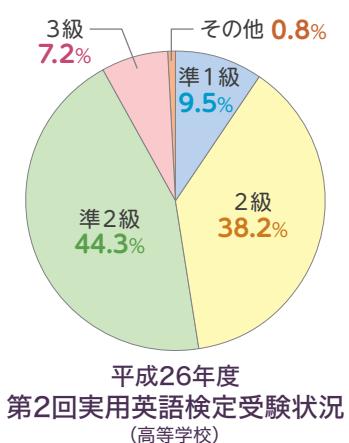


国際化が進む社会において、今求められている英語力を身につけることは将来の可能性や選択肢を広げ、異文化への理解を深め合う大きな助けとなります。自分の意見を自分の言葉で表現できる眞の国際人を目指し、これからも生徒たちの輝く未来のために全力を尽くしてまいります。

学研修に参加した意気込みや目標について発表しました。学校の授業、ホストファミリーとの生活と毎日が充実していたようで、ホストファミリーとの別れの際に号泣している生徒もいました。参加した生徒にとってこの語学研修は、かけがえのない出会いに恵まれ、たくさんの驚きと発見に満ち溢れた忘れられない17日間になりました。



ユニークな衣裳で決めポーズ



まつてくると言われています。おそらく今のが生徒たちが社会に出る頃には、英語が使わなければ、世界のライバル達と同じ土俵に上がる事すらできないような時代になつていることでしょう。今後も実用的・実践的な英語の習得に力を入れるとともに、目標を持って学習に取り組めるよう、英検対策講座もより一層充実させていく予定です。





満3歳児保育(つくし組)開始



川村幼稚園では、子育て支援の一環として、3歳のお誕生日の翌日からお子様をお預かりする満3歳児保育を開始いたしました。

この月齢の子どもは個々の成長の差が大きいことが予想されますので、カリキュラムも満3歳児にとって負担がないよう柔軟なものにし、心身の健やかな成長を助長するよう十分に配慮していきます。子どもたち一人ひとりが、のびのびと、楽しく通園できるように、また保護者の方が安心して子育てができるよう、保育日や昼食・保育時間など個々の事情に対応しながら支援してまいります。



正解のない問い合わせに挑む－共生－ クエストカップ全国大会出場

高校1年生は総合的な学習の時間に「クエストエデュケーション（職業探求プログラム）」に取り組んでいます。これは、企業におけるインターンシップを教室で体験しながら、働くことの意味や楽しさ、企業活動への理解を深める活動です。1年間の学習の集大成として、各企業から出されたミッションに対し、情報を集め、チームで話し合いながらプランを完成させ、プレゼンテーションを行います。

学校での授業とは違い、正解のないものについて探求していくという姿勢は社会に出てから絶対に必要とされるものです。本校は3年連続で優秀作品に選ばれ、全国大会に出場しました。今後もこの取り組みを通して、活きた力をつけてもらいたいと考えています。



川村学園は、本年4月12日に創立90周年を迎えました。記念事業の一環として発刊した学園90周年記念誌「川村学園の女子大学25年のあゆみ」は、大学創設から現在にいたまでの四半世紀の道程を取り上げています。この記念誌は、ホームページから閲覧でできますので、ぜひご覧ください。

本号の黄鶴では、90周年を迎えての理事長・学園長の挨拶をいたしました。学園の歴史の重みを感じつつ、来る100周年に向けて更なる発展を見据えた力強い意気込みを感じ、それを受けて、脈々と受け継がれてきた学園精神を改めて認識する「教学の指針」を掲載いたしました。各校においては、大学では2015年度から始まる「我孫子」と「日白」の2キャンパス制について、中高ではオーストラリア語学研修、英検対策講座、小学校では放課後活動の充実など、新たな取り組みにスポットをあてて紹介しております。年間1回の発行ですが、これからも学園の新しい情報をより分かりやすく、お伝えできればと考えております。

〔編集後記〕

タニカルアーティスト 根悦子さんプロフィール

表紙挿絵

2014年3月、イタリアのボローニヤ国際絵本原画展で「ぺんぺんぐさのふゆとはる」の原画が入選。上橋菜穂子先生に国際アンデルセン賞の発表があった同会場にて、山根さんの作品も展示され、世界の絵本の出版社が注目しました。この絵画原画展は、日本各地で巡回展示されています。

*
川村中学校・高等学校・川村短期大学保育科を卒業後、武蔵野美術短期大学を卒業。現代童画会会員・日本植物画倶楽部会員。第12回ハント国際ボタニカルアート展入選、英國王立園芸協会フラワーショー準金賞。絵本作品として、「ゆうがたさくはな おしろいばな」(月刊絵本「かがくのとも」2010年7月号)、「べんべんぐさの ふゆとはる」(月刊絵本「かがくのとも」2013年1月号)を出版。『学研もちあるき図鑑』一まるごと日本の季節一(2011年4月)、一まるごといつもの食材一(2011年7月)のイラストを手がける。

黄鶴 第23号 (年1回発刊)
平成26年10月24日発行
発行人 学校法人川村学園
総合デザイン 萩原 延元
編集 黄鶴編集委員会



学校法人 川村学園

〒171-0031 東京都豊島区自白 2-22-3 03-3984-8321(代表)
URL <http://www.kawamura.ac.jp/>